

夜間救急の病院にとって、年末年始は一年で最も忙しい時期です。かかりつけの動物病院は休診であることが多く、飼い主さんご自宅にいたることが多いため動物の異変に気づきやすいことなどが重なるのですが、普段の夜間救急とはひと味もふた味も違った雰囲気漂います。

動物が急変したときのフローは、以下のような流れになると思います。

- ①動物の状態が急変する
- ②急変に飼い主が気付く
- ③病院を受診するか検討する
- ④病院を探す
- ⑤病院に問い合わせる
- ⑥病院に行く
- ⑦救急処置を受ける

後半のフローに関しては、私達救急病院が取り組むべき課題で、前半に関しても、獣医師側の啓蒙活動も求められますが、基本的には飼い主さんの意識やWebなどでの情報収集力が求められます。

2021年12月31日～2022年1月3日の4日間に、当院を来院した犬猫は125症例でした。内訳は犬87件、猫38件で、多い犬種として犬ではトイ・プードル、ミニチュア・ダックスフンド、雑種と続き、猫では雑種、スコティッシュフォールド、ロシアンブルーの順に多く受診されました。年齢は犬だと1歳未満と10歳以降が多く、猫では10歳を中心に山なりに年齢が分布した印象です。疾患としては、犬では消化器疾患が最も多く、次いで誤食や脱臼・脊椎疾患など整形外科疾患が続きました。猫でも消化器疾患が多いものの、同じくらい膀胱炎や尿閉など泌尿器疾患が目立ちました。

備えを常に ～スマホの中のお守り～



文 伊藤 和人
text by Kazuto Ito



これらの疾患には、嘔吐や血便、どこか痛そうなど派手で分かりやすい症状が多く存在します。中には少し元気がなく、歩行時に少しフラつくなど控えめな症状もありますが、実は短時間で命を失う予兆であることもあります。

飼い主として何ができるのか、ここで一緒に考えてみましょう。

過去に患ったことがある病気のリストを作っておく、現在服用中の薬内容を正確に把握しておく(粉薬などで

成分が分からず苦慮することがあります)、最寄りの夜間救急病院を探しておく、少しでも不安があればかかりつけ病院がお休みになる前に受診しておくなど。

当たり前ですが急変というのは突然やってきます。いざというとき、慌ててしまうか落ち着いて対処できるかは事前準備の有無によると思います。スマホのメモなどに既往歴の概要や内服一覧、救急病院の電話番号やURLなど記入しておくだけでも、心の余裕が生まれると思いますので、ぜひ実施してみてください。



Profile

獣医師
1986年埼玉生まれ。2011年日本大学 生物資源科学部 獣医学科を卒業。横浜のMOMOどうぶつ病院、国立のふく動物病院にて一般臨床を学んだ後、2016年現職であるTRVA動物医療センターに就職。臨床と診療支援の間に立ち、日夜奮闘中。趣味：音楽鑑賞、カメラ